

### 守口夜間中学の生徒たち

大阪守口市、京阪電鉄土居駅のすぐ近く、典型的な大阪の民家と商店の入り混じった住宅地の一角にいわゆる守口夜間中学がある。正式名称は守口市立第三中学校夜間学級。れっきとした公立中学である。門をくぐり案内された校舎の二階に靴をぬいではいったとたん、思いがけない光景が目にとびこんでくる。

廊下の壁と教室の窓ガラスはほとんど隙間のないほど生徒の作文や標語、ポスターやイベントの写真でうめつくされている。ほとんどの日本語の漢字にはルビがふられているかとおもえば、中国語簡体字もハンゲルもみえる。

会釈をしながらすぐ近くの教室にうしろからそっとはいる。一〇人ほどの生徒は、中学生というにはちよっと不釣り合いな六〇歳前後の男女が大半、いやほとんどをしめる。なかには二、三〇代の若い女性とともに八〇歳近いと思われる女性もいる。学校の主旨からある程度心づもりをしていてもこの印象は強烈だ。

それだけでない。生徒たちが読んでいるのは、ひらがなと少し漢字の混じった教科書。おそらく一般の小学校なら二、三年生のレベルだろうか。読む順にあたった高齢の女性が、ゆっくり指で文字をたどりながら読みはじめ。まちがっても生徒はひるまない。いくつかの当てずっぽうかな？とも思える読みが続いたあと、教師が助け船を出す。さらに生徒とのかけあいをまじえながら授業は和やかに進む。

### 夜間中学の役割

白井善吾さんは守口夜間中学に勤めて二〇年のベテランである。ずっと理科を担当してきたが、他の教師同様、通学や学習についてはもちろん、自分とは同輩以上の生徒のあらゆる相談にもつてきた、彼らにとっては、単なる教師以上のたよりになる存在である。

着任当時、すでに夜間中学は在日コリアンの学びの場としてあったが、それ以降も夜間中学の姿容と存在意義を白井さんはつぶさに見てきた。

夜間中学は終戦直後、昼間の中学にかよえない生徒に学習の機会を保障する目的で一九四七年設立された。一時は全国に八七校も存在し、五二〇八人も生徒がかよっていたという。その後、一九六五年の日韓条約を契機に韓国からの引揚女性にとって断絶していた日本社会復帰のための学びの場となり、さらにそれがきっかけで在日コリアン女性が文字を獲得するための場として開放された。いずれも、戦中から戦後にかけて、教育をうけられず、文字をしらずにいさる苦しみをあじわった人びとである。

そして今、夜間中学は、中国引揚帰国者、呼び寄せ家族、日本人と結婚した女性たちにとって、日本語と日本社会で生活するための知識を獲得する場として存在意義を強めているという。守口夜間中学では今、中国帰国者が全校生徒一五〇人の三分の二近くをしめるようになった。彼らの学習欲は旺盛で、働きながらも夜間学校にかよい新聞の社説を読むレベルに達する人もいる。

現在、日本全国には三五校の夜間中学、約二〇

多文化を  
ささえる  
人びと

# すべてのひとに文字とことばを ふたたび——夜間中学の今

学歴社会といわれる日本で、かつて貧困や労働、障がい、あるいはいじめなどで学校にいけず、文字をしらない苦しみを背負いながら生きてきた人は一説では100万人以上といわれる。彼らにとって、夜間中学は、文字への希望をよみがえらせ、人生の失った数十年を取り戻すかけがえのない場を提供してきた。戦後まもなく活動をはじめた夜間中学は、今また、あらたな希望と生きがいの場として注目されている。

しょうじ ひろし  
庄司 博史  
民博 民族社会研究部

### 夜間中学での学び

クラスによっては生徒の大半は在日コリアンの高齢者がしめる。戦中戦後の学齢期に学校にかよえず、文字を学ぶ機会を失った人びとである。そして今まで文字であふれる社会に生きてきた。電車やバスの切符が買えないため一人で遠出もできず、子どもの学校からの書類もわからずにさんざん文字を知らない苦労と不便にもたえてきた。そして、子どもが自立し、仕事から解放された今、ようやく、あこがれの文字にはじめてふれる機会ができた。それも正式の学校の生徒として。今では生徒手帳をもって、望めば学割の定期で通学も可能になった。

日本語学習に力点がおかれているとはいえ、授業科目には昼間の中学同様、社会や数学の授業、そして保健、体育や音楽もふくまれる。補食とよばれるが、簡単な給食の時間ももうけられ、秋には文化祭、春には遠足にも参加できる。同じ経験をもつひとに囲まれ、誰にも遠慮せず、なんでもいえる雰囲気の中で、経験しえなかつた学校生活を取り戻そうとする生徒たちと周囲の努力が学校全体で感じられる。

しかし、最高のよろこびはやはり、文字を学び、社会とのつながりができた達成感だ。はじめて自分の名が書け、看板の一字が読めるようになってきた感激はおそらく本人しかわからないだろう。「文字とことばは武器」、「夜間学校で社会のことがわかりました」、廊下で目にした作文や標語は彼らの文字や学ぶことへのあつい思いをあらわしたものであった。

校のボランティアによる自主夜間中学がある。夜間中学を必要とする人びとがまだまだ日本にはいるということの証しだと白井さんはいう。今、白井さんには大いに気がかりなことがある。財政難から夜間中学への自治体の就学援助がカットされはじめ、大阪府や政府からは修業年限の短縮や就学条件の厳格化をはかろうとする動きがみられることだ。学ぼうとするひとがいるということこそ社会にとっては歓迎すべきことだと思ふのだが。廊下で見た標語のひとつ「学びの場を奪わないで」の意味がようやくわかった気がした。

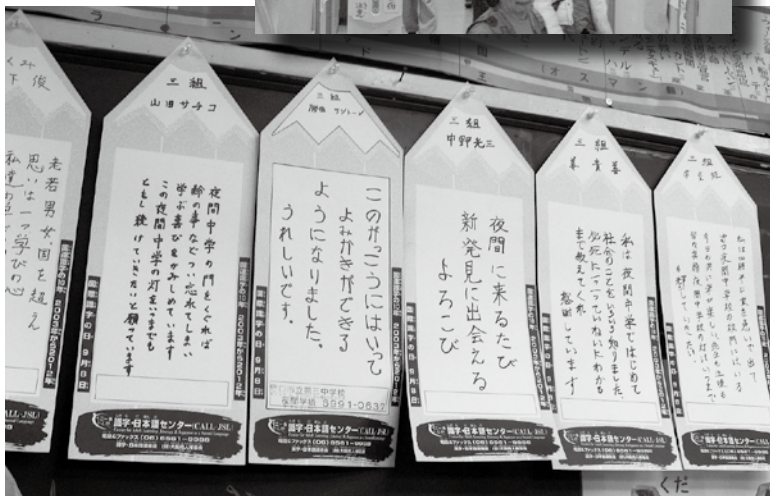
各クラス合同の保健の授業



夜間中学の廊下。さまざまな文化・ことばの交差点である



廊下にはられた生徒たちの訴え。従来あった補食給食は2009年4月より大阪府補助がなくなり中止されている



生徒たちの夜間中学へのおもいが文字になった